

篤い提言あるいは老いの練言

河村民部

「大学院教育を問う」という特集を組むから、文芸学研究所の研究科長を経験した人には、是非投稿するようにとの要請が、『渾沌』の編集委員長からあった。これを機会に私の考えている大学院教育の問題点と対策を述べてみたいと思う。

最初に文芸学研究所を設立したときの意図を振り返ってみた。文芸発祥の地である大阪に文芸のリバイバルをなさしめたという近大前総長世耕政隆氏の熱い思いを受け、この研究科を発足させようとしたのは、現在和歌山の田舎に隠棲して、晴耕雨読の間、毎年執筆をしては、その著書を送ってくださる英文学の大先輩で、文芸学部の初代学部長であった塚野耕氏である。その思いを継承し、それを実現に至らせたのが、今は亡き小説家後藤明生氏であった。

私事で恐縮であるが、その設置準備当時には私も後藤さん

(後藤氏とか後藤先生と呼ぶのは堅苦しいので、いつも後藤さんと呼んできた)に呼ばれ、世耕政隆氏とともにミナミに出た。夕食をともしながら、文芸学研究所の設置を熟く語り合った。また毎日のごとく夜遅くまで後藤さんと大学に居残って、文芸学研究所の目的の文案を定め、研究科を構成する日本文学専攻、英米文学専攻、国際文化専攻の特徴とそれを生かす人的配置、そして科目名とカリキュラムを詰め、募集要項の文言を作成し、果ては募集要項のパンフレットの写真(最初の文芸学部の建物となった10号館の外観)まで二人で撮っては、その寸法を計算して表紙を創った。日文の創作評論コース設置に関しては、そうしたコースを持つアメリカの大学院からその資料を取り寄せ、英文で人が足りないといつては他大学から無理を言って相応しい方を貰い受けに二人で出向き、新聞広告に大々

的に二面ほど紙面を占拠して、各専攻の代表的な先生の写真付
きで堂々と文芸学研究科の宣伝を行った。

こうして短期間のうちに大車輪で準備をして、文芸学研究科
が発足した。それは文芸学部が出来て確か五年目のことであつ
たと思う。学問をするにはその資金が必要である。研究科に
「入院」(と後藤さんは冗談交じりによくこう言つておられた)
してくる院生は、まだ平成のはじめ頃であつたから、金銭の余
裕が現在よりは多少あつたであろうし、また大々的な宣伝効果
も功を奏したのである。当初の目的の定員を十分満たしてく
れた。各専攻とも最初であるから特に力を入れてこれらの院生
を大事にし、学問をさせたことは言うまでもない。一杯飲み
にもよく連れて行き、教師自らも自腹を切つて資本投資をしな
がら彼らを育てた。

それで後藤さんは修士二年を終了した院生を各専攻から選ん
で副手に任命し、各専攻の事務の手助けや後輩の院生の指導に
当らせた。そうしたことさせながら、教員の方も副手に学問
継続の手助けをした。今は残念ながらその副手の制度もなく
なつた。当時の副手は現在それぞれに研究を続ける傍ら、大
学、高校などで教鞭を執つて、立派な教師になつてゐる。

文芸学研究科の特徴の一つに、論文の中間発表会と、修士論
文提出後の最終発表会を設けていることがある。もともと中間
発表は二年次生の秋に各専攻内でそれぞれ院生に発表させてい
た。そして最終発表は研究科の専任教員全員が参加するといふ

建前で、修論作成者に一人ひとり発表をさせ、それぞれに専攻
の区別なくコメントをして、励ましてきた。この制度そのもの
は今でも継続されてはいるが、形式・内容ともに変化を来たし
ている。このことについては、後でまた触れたい。

このようにして修士二年間を終えた院生は、他大学の博士課
程に進学する者、会社に勤める者、高校の教師になる者、結婚
して家庭の主婦となる者など、それぞれの意志に従つて、社会
に出て行き、活躍している。これが文芸学研究科を設置してか
ら十年くらいの間の研究科の様子である。

さて、これは言うまでもないことであるが、「大学院教育」
は教える教員と教えられる院生の双方の求める条件が一致して
はじめて成り立つものだと思う。設立当初の院の様子を語つた
のは、ほかでもない、この両者の求めるものが比較的よく一致
していたように思えるからである。今はどうか。

歳を経ると人も変るが、制度も変質する。まず昨今の不安定
な日本経済の動向の煽りを受けて、進学者が経済的に不安定に
なつてきた。必然的に進学の出足も鈍る。学部の学生で、進学
の希望を持つ者でも、往々にして家庭の経済的余裕がないの
で、両親から就職を切望され、やむなく自分の意思を曲げるも
のが多い。それでも意思を貫き通して進学してくる者が不在
けではない。だが、そうした者は少数数で、院での研究の支え
は、もっぱら奨学金とアルバイト料である。またいったん社会
人となつた者がユータンして入学してきたものの、金銭のバツ

クアップ不足と本人の精神的挫折から、研究を諦め、再度社会に戻っていく場合もある。

勿論、国と大学にはそれぞれ奨学金制度があつて、応募しさえすれば、いずれかの奨学金を受けることはできる。だが、それは返却という義務を負わされている場合がほとんどであるから、学生はそれだけでなくも厳しい経済状況であるので、未来の負債を背負つてまで、今の意思を貫こうとはしない。それでも進学してくる者は、学問への情熱に突き動かされて、未来の負債を覚悟でやってくる勇氣のある人である。進学者の大半は、確固たる意思の持ち主か、あるいはこれしか生きる道がないと思う人で、しかもアルバイトなどで何とか研究を続けられる、比較的経済的に安定した人に限られてくる。こうした現状に鑑み、日本の知的発展と良質の文化維持のために、国にも大学にも、学問の情熱がある学生には躊躇わずに進学できる経済的支援を切に要望する。

変質したのは経済的状况ばかりではない。院設置当初の院生と教員の一致団結した様子の一端を上述べたが、研究科の内部の学問・教育のあり方および運営面においても、当初とは質的变化を来たしているような気がする。以下のことは私の個人的な印象であるから、間違っているかもしれない。その節は批判願いたい。

まず学問・教育のあり方であるが、私が研究科長を勤めていたときに、日文の院生が提出する論文のタイトルが、従来のもの

のと違って、一様に社会学とか思想史とか歴史といったような学問分野のもので、文学の「文」の字もない、およそ文学の論文とは思えないようなタイトルになってきたので、委員会でそのわけを尋ねてみた。すると確かに従来の研究とはその方向が違い、文学研究と社会学研究などの領域区分がなくなつてきているが、それこそが現在の研究の先端を行つている証拠であり、私などの考える研究方法はもはや古いという返事であつた。

私自身ヴィクトリア朝文学の研究家の端くれであり、当時のイギリスの社会的事情、特に産業革命による貧富の差の拡大や田舎から都会への価値観の変遷が、そうしたことを反映させた社会小説を生み出した事情の研究なしには、ヴィクトリア朝小説が理解できないことを知らないわけではない。だが、研究の主たる対象が、小説というコンテクストを離れて、福音主義研究とかマルクス主義研究あるいはペンタム研究そのものになつてしまつたのでは、それは修士号にいう「文学修士」の名に当てはまらないのではないか、それだと「社会学修士」とか「思想史学修士」あるいは「経済学修士」などとすればよいのではないかと考えた。

こうした研究方法の変化が、多様な文学理論の勃興と波及によつて生じたことは、よく分つている。そのような拡大した幅広い視野から、改めて文学テクストの読み直しをすることがいけないというわけではない。現に私自身「日本ヴィクトリア朝

文化研究学会」の理事でもある。だが本体の文学テクストを離れて、それを支えるバックグラウンドの方にのみ特化していく研究方法には、やはり問題があると思う。

そうしたことがあって、私自身は、修士論文の発表には、専攻の隔てなく、全教員が参加し、意見を述べて、院生を励ますという院の設置当初から行っていた習慣を、途中で中断した。なぜなら、他専攻の研究発表に出席して発表を聴いても、何を言っているのか理解できなくなってきたからである。日本語らしい言語で発表してはいるが、その内容はまるで見知らぬ言語による論述のように聴こえた。少しは外国の文学に通じている私がそう感じるのであるから、外国の文学理論のことをまったく知らない人にとつては、なお更わけのわからぬことになったのではないかと思う。その結果、他にも事情はあるであろうが、今では主として専攻毎に専門の教員が出席して、専門分野の教え子の発表を聴き、コメントをするというような慣わしになった。尤も、できるだけすべての学生の発表を今も聴きに来ておられる偉い先生がいないわけではないが、それはむしろ例外であろう。

こうした専攻の垣根を取っ払った発表の場には、聴衆に分つてもらえるような発表をするように、院生を指導する責任が教員の側にもあるのではないだろうか。これはなにも日文専攻に限ったことではない。英文専攻においても、その専攻内においてであれば問題ないであろうが、色々な専攻の人が交じり合っ

た場所での英語による発表は、考えものである。国際文化専攻においても、専門領域が特化している場合の発表に場合には、できるだけ分りやすい発表を心がけるよう指導することが望ましい。

運営面についても一言申し上げたい。それは博士課程の設置に関することである。これも私が研究科長のときに院の在校生にアンケートをとったことがある。大半の院生は、自分は博士課程に進学することは出来ないが、制度としてはあった方がよいとの返事であった。それで私は、今のよう日文、英文、文化といったそれぞれが独立した専攻別の博士課程ではなくて、三専攻を総合して一つにした、たとえば人文科学研究専攻といったような名称の博士課程の設置を検討したことがある。だが、日文の教員からは、「うちは博士課程には他の大学に行かせるから必要ない」といわれ、国際文化専攻からは、「うちは専門の学問に特化することをもともと目指していないので、必要ない」といわれた。これらの主張を支持するように、現在ではオーバードクターの氾濫で、博士課程を出たのはよしが就職先がないのだから、これ以上重荷を背負い込む必要はないという議論が支配的となっている。

だが、果たしてそうであろうか。掛け口が容易に見つからないことは確かである。だが、そうだからといって、本来ならば自分のところで引き受けてしかるべき学生を、他大学に負んぶさせていて、それでよいのだろうか。他の大学でも博士課程は

重荷に違いない。だが見識ある大学では、それを承知で博士課程を継続している。そして必死になつて教え子の世話をしようとしている。教え子も就職先のないことにも耐えて、必死に研究を続けている。教員の側にも学生の側にも忍耐が強いられる現状ではある。だが、名門と呼ばれる東京の私学の六大学はいずれも博士過程を撤廃したところはない。これはその大学が社会的責任をどのように果たすかという試金石の問題である。我が近畿大学も関西きつての大手私学であるからには、それ相應の社会的責任を背負うべきだと思ふ。これからの文芸学研究科の重い課題として、よく検討願いたい。

これは単に一私学の問題だけではない。日本のこれから先の学問のあり方や学者や研究者の育て方の根本に関わる国家的問題である。文部科学省にも深くこのことを考えていただきたい。これは大学院のみの問題ではない。ひいては大学院の基となる学部の教育研究のあり方の問題でもある。最近になつてやつと学部生の就職が学生の勉強の時間を食っているから、就活は四回生になつてから始めてはどうかといった議論が、文科省からではなく、経済界から発案された。私はとつくの昔から、就活は卒業後に大学も社会も責任をもつてこれを援助すべきだと思つてきたし、会議でもそう言つてきた。また新聞にもそのような意見を投稿した。だが、いずれの場においても、このような意見は封殺されるか、無視されてきた。

日本の将来を担う若者を教育し育てるのが大学の使命である

からには、四年間たつぷりと学生に勉強してもらいたい。入学当初から就活が大変だから、就職を自覚しなさいといつて、大學生を焦らせ、大学の最終目標が就職にあると思わせるような教育は、しないでもらいたい。学生の自分は、就職にあるのではない。学問にあるのである。このことを、大学も、文科省も、経済界も、否、国全体が、肝に銘じてもらいたい。そうして時間と手間隙をかけて将来を担う、しつかりとした中身のある若者を育ててほしい。そうでなければ、日本の将来は危ない。定年を前にした一教員の心からの願ひである。

イギリスの経済学者ジョン・スチュアート・ミルは、幼い頃父親から英才教育を受け、ペンタムの功利主義を叩きこまれて育つた。そのミルは、しかし、青年になるに及んで、自分には人として必要な感性がないのではないかと思ふようになる。そこでミルはワーズワスの詩を読み、感動して、まだ感性の残つていたことを喜び、人間の教育の根本は、この感性の教育にあることに気付く。そしてミルは、目の前の利益のみを考える功利主義を廃し、一見役に立たないと思ふような詩の教育の重要性をこそ主張し、詩の擁護論を書いた。

日本の再生は経済にのみあるのではない。今こそ経済学者ミルの詩の擁護論の大切さを、日本はしっかりと認識すべきではないだろうか。特に大学は教育の原点として、この人の心の涵養ということに、立ち返る必要がある。

このような学部教育の上に立つてこそ、はじめて大学院の本

来の教育が成り立つ。大学院の教育を再考する場合、その基盤となる学部教育の本来のあり方をよく考える必要がある。このことを提言して「大学院教育を問う」という課題の結びとしたいが、硬いことを言ってきたので、口直しに、私の大好きな詩人以倉紘平さんの「雨晴という駅」(詩集『フィリップ・マローの拳銃』(沖積舎、2009.8)、ちなみに以倉さんはすこし前までの私たちの同僚で、この詩集で丸山薫賞を受賞)を引用してお仕舞いにしたい。皆さんも夢現の交錯する以倉ワールドに触れて、涙して下さい。

雨晴あまはるという駅

雨晴

なぜこころが動くのか

失われた夢の

かすかな痕跡のように

雨晴という地名は朝からほくのこころのなかにある

ほくのまだ行ったことのない富山県の冬の駅

夢に降り立ったかもしれない駅

夢の中にいるのはもうひとりの私という説がある

夢の中の私とは何を材料にできているのだろう

行方不明だったきみが

雨晴という名の駅にすがたをあらわしたのだ

待っていてね

多くの人生に もうそんな日は二度と来ないから

一緒に 改札を出て

バスに乗って

ふたり

雪の降る道を

相合傘で

海の方へ

歩いて

また遠く

旅立ってしまうきみを

いつまでも見送っているほく

雨晴という駅

(2010.12.18)